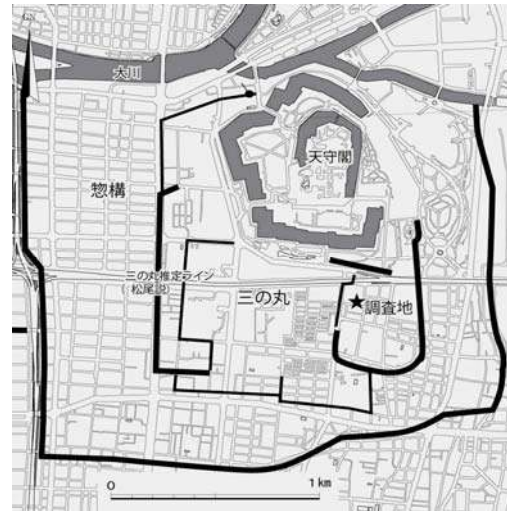


4. 豊臣時代の大坂城の鍛冶工房跡（大阪市中央区森ノ宮2丁目）を訪ねる 2011. 4. 16.



豊臣時代の大坂城南側から見つかった大規模な鍛冶工房跡

大坂城に鍛冶工房跡

豊臣秀吉が築いた大坂城跡（大阪市中央区）の南側から、刀などの鉄製品を製造する大規模な鍛冶工房跡が初めて見つかった。一度に6基もの鍛冶炉が出土する例は珍しい。14日、大阪市教育委員会と市博物館協会大阪文化財研究所が発表。大坂夏の陣（1615年）を前に豊臣方が軍事的に利用した可能性もあるという。

豊臣時代後期（1598～1615年）の遺構で、東西15㍍、南北4～5㍍の敷地に三つの工房が並び、鍛冶炉が2基ずつ、計6基あった。市博物館協会は「大坂城普請のために大名が土木用のくわなどを作る工房として設置した可能性もある」としている。

現地公開はしないが、出土品を16、17日午前9時30分～午後4時30分、大阪市中央区大手前4丁目の大阪歴史博物館（06・6946・5728）で無料公開する。（大崎和明）

豊臣方、夏の陣で利用か

豊臣時代の大坂城南側から見つかった大規模な鍛冶工房跡—大阪市中央区、中里友紀撮影

豊臣時代 大坂城の鍛冶工房跡が出土したと伝える記事 朝日新聞 2011.4.15. 大阪版朝刊

2011 年 11 月 14 日夜 ラジオのローカルニュースで「大坂城の鍛冶工房跡出土」のニュースが流れ、翌日の新聞にもその記事が掲載された。

「大坂城跡の南側から豊臣時代 大坂城の鍛冶工房跡が出土。 出土地が工事現場で 現地説明会はないが、

4 月 16 日・17 日に近くの大阪歴史博物館で出土品が展示される。」

安土桃山時代から江戸時代へ移る戦乱の豊臣時代 その中心にあった大坂城の城郭の中に出土した鍛冶遺跡。

鉄製品は出土していないというが、戦乱と直接関連付けられる鍛冶工房が出土したのを聞いたことはなく、詳細は分からないが、どんなところで出土したのか 是非見に行きたくようと 4 月 16 日(土)に出かけました。大坂城の南側には広い難波宮跡史跡公園が広がり、その東端 かつて大坂城の城郭 南東の一角 出会ったところが出土地でした。

桜の名所 大坂城は桜の散り染め 葉桜が美しく、緑が少ないといわれた大阪の中心。 難波宮跡 史跡公園が整備され、かつての殺伐とした法円坂一帯がこんなに緑があったのかと。 鍛冶遺跡を訪ねるとともに 新緑の大坂城周辺 walk を楽しんで帰りました。



1. 豊臣時代の大阪城の鍛冶工房跡地(大阪市中央区森ノ宮2丁目) walk 2011. 4. 16.



中央大通り法円坂交差点角



法円坂西側から 東側 大阪城・難波宮史跡公園を眺めた google 画像

大阪歴史博物館ロビーに展示されていた出土遺物を見学後、出土した鍛冶工房跡の位置を確認して 表に出る。

大阪城の堀端南西端にある NHK・大阪歴史博物館から一筋南へ行くと道の上を阪神高速道路が走る大通り「中央大通り」の「法円坂」。今いる法円坂の交差点の西側 本町方向から、大阪城の南側を通って東の森ノ宮へ、道の上を走る阪神高速とともに大阪の中心を東西に横切る幹線「中央大通り」。

大阪城の鍛冶工房跡が出土した位置はこの中央大通り沿いの南側 難波宮史跡公園の東端の中央大通り森ノ宮ランプ入口「森ノ宮入路」の標識がある交差点の東南側マンションビルの建設工事が今進められている場所でした。

(森ノ宮2丁目 工事現場の西側沿いの道端に難波宮東端の案内板がある)

ビル工事に伴う難波宮遺跡の東端の発掘調査の過程で、上層の地層からこの鍛冶工房遺跡が出土したという。



北側大阪城公園 天守閣が見える



法円坂交差点 北西歩道橋より



南側 難波宮跡史跡公園から森ノ宮

中央大通り法円坂交差点から東側 森ノ宮方面 2011. 4. 16.

中央大通りの南側に沿って広がる広大な難波宮史跡公園の中を東へ歩き出す。

かつて この辺りは難波宮跡が眠っていることから開発から取り残され、殺伐とした場所であったが、びっくりするほど広い緑いっぱいの史跡公園に整備されている。 大阪には緑がないと良く言われたものですが、こんな大阪の中心に真っ青な青空と新緑が眺められる公園に整備されているとは……。 この辺りに来ても ついつい大阪城の方へ眼が行って全く知りませんでした。中央大通りの北側にはビルが立ち並び、大阪城全体を見ることはできないが、北側 100m 弱の位置が大阪城の南御堀端で、ビルの中から時折、大阪城の天守閣が見える。



難波宮史跡公園の中を中央大通りに沿って東へ (左:西の歴博・法円坂 中央:北の大阪城公園 右:東の森ノ宮方面)

この中央大通り沿いを東へ5・600mほどで 難波宮史跡公園の東端に出る。ここから東へビルが立ち並ぶ中に、大きな起重機が何本も並び立ち、工事真っ最中のビル建設の工事現場ある。高速道路「森ノ宮ランプ入口」の下で「森ノ宮入路」の標識がある交差点の南東側で、工事現場の囲いの道端に難波宮東端の案内板が立っている。

この工事現場の中が大阪城の鍛冶工房跡 出土地である。

工事現場に立ち入れないので、鍛冶工房跡を見ることはできないが、現場の入口からは 工事現場全体が見渡せ、一番奥 東南端に青いシートがかぶせられた一角があり、これが鍛冶工房跡だった。



難波宮跡公園の東端周辺中央大通り と その東 森ノ宮ランプ入口周辺 鍛冶工房の出土した工事現場（西側より）

大阪城は中央大通り北側に沿うビル街でみえないが、中央大通りを挟んで北側 約50mに大阪城の南お堀端である



工事現場 中央王通り正面より 左奥が出土地

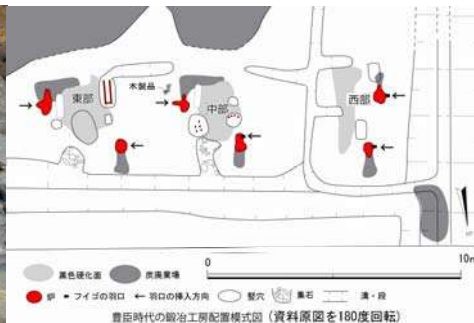
工事現場 西南角より 奥が出土地



大阪城の鍛冶工房が出土した工事現場の北西角 阪神高速の中央大通り森ノ宮ランプの入口と難波宮東端の案内板

豊臣時代の大坂城の鍛冶工房が出土した森ノ宮二丁目 工事現場

2011. 4. 16.



大阪城南側で発見された豊臣時代の大規模な鍛冶工房跡 （注 左写真の上が北 中央写真の上が南 である）

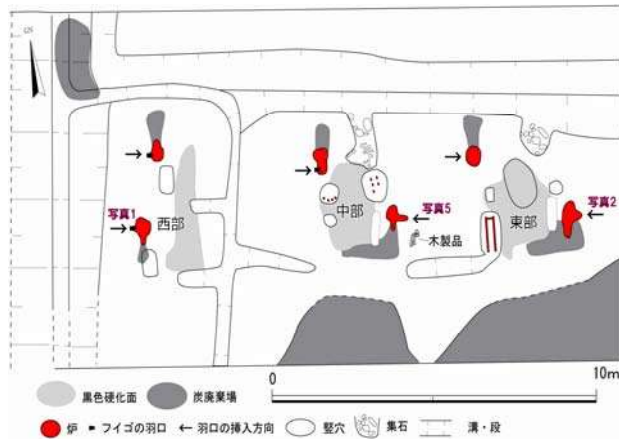
城外郭の軍事的な重要地点に存在した規模の大きな鍛冶工房であり、豊臣方の勢力が設置した工房だろうとみられるが、鉄製品の遺物が出土せず、目的など詳細は不明である。
大坂夏の陣（1615年）を前に豊臣方が軍事的に利用した可能性や、大坂城普請のために近隣に屋敷を構えた大名が土木用の鉄などを作る工房として設置した可能性もあると考えられている。

小高い高台になっていて、鍛冶工房跡がよく見える工事場の東側にまわって、前日インターネットからコピーした資料(大阪歴博の展示場でもらったものと同じでした)を取り出し、位置関係を照らしあわせる。

この辺りは 上町台地の東北端にあたり、この東北端の台地の上に大阪城が築城された。そして 鍛冶工房が出土した位置は当初鍛冶工房跡の南東側下に谷があった様ですが、工房廃絶後すぐに盛り土で埋められてしまったため、工房跡がしっかりと残っていたらしい。

また、この高台の起伏も 上町台地の起伏の名残なのかもしれぬ。

この小さな谷に面した位置に3区画に区分されて 鍛冶工房が3つ東西に立ち並び、それぞれには2基の鍛冶炉と作業場があったようだ。そして、谷は鍛冶工房から出た鉄滓や炭が捨てられていたようだ。



出土した鍛冶工房跡(写真上が北) 東西に3つの鍛冶工房区画が立ち並んでいた

鉄製品が出土していないので、刀などの武器の製造所であったかどうかは不明であるが、長さ約1m 幅0.2mの木枠施設が見つかっており、内部に詰まった砂は赤く発色し、粉末化した鉄が多く含まれていて、高温の鉄を急冷させて、表面を硬化させる焼き入れに用いた水槽と考えられ、刀などの長い製品を製作した可能性があると資料にあった。

大阪城築城後も防護機能拡充のため、秀吉が死去するまでに二の丸、三の丸、総構えが建設され、3重の堀と運河によって囲まれた難攻不落の白となった。秀吉は三の丸の完成を見ず、1599年死去する。そして、1600年関ヶ原の戦いを経て、江戸時代が始まったが、豊臣と徳川が大阪城を舞台に対峙し、大阪夏の陣・冬の陣(16014・1615年)を経て大阪城が落城し、豊臣氏が滅んでゆく。この三の丸築造(1598年-)に伴う大規模な盛り土の上に作られた大阪城の鍛冶工房。

滅び行く豊臣氏 大阪城を必死に守るための土木工事に使われた工具類や武器の製造や補修が行われたろう。

そして 数々のドラマを見聞きし、大阪城落城をも見たのだろうか・・・

そんな豊臣氏が滅び行く過程 大阪城落城前夜に大阪城にあった鍛冶工房。そして 廃絶後 すぐに埋められてしまう。テレビドラマや映画に出てこぬ大阪城落城過程の一ページである。

ぐらりと工事現場の後を一周して 中央大通りを北にわたって、大阪城公園へ。

葉桜と淡い新緑の緑が入り混じる春の息吹を感じながら 御堀端を北へめぐる 天満橋から大川へ出て 梅田までぶらぶらのwalk。大阪は緑が少ないと言われるのですが、緑いっぱい 大阪新緑探訪のおすすめコース。

また 大阪城から難波宮史跡公園へ 大化の改新で遷都された難波宮の歴史探訪。もっと遡れば、縄文時代 森ノ宮は大阪湾に面する上町台地の北端で、台地の東側に広がる河内湖の入口にあたり、数多くの縄文人が暮らしていた。今回大阪城の鍛冶工房跡が出土した位置から1ブロック東には西日本最大の縄文貝塚遺跡である森ノ宮遺跡。

大阪城周辺へはいつも地下鉄でいって 地下鉄で帰ってしまうため、こんなに気持ちの良い空間が作られていたとは知りませんでした。新緑探報・歴史探訪にお勧めです。

2. 大阪城の鍛冶工房跡(大阪市中央区森ノ宮 2 丁目)から出土した遺物

大阪歴史博物館ロビーで 2011. 4. 16.



馬場町 大阪歴史博物館と NHK



中央大通りより鍛冶工房が出土した工事現場を見る



大阪歴史博物館ロビーに展示された大阪城の鍛冶工房跡の出土品展示 2011. 4. 15.



竹筒と木製鉄



鍛冶炉 羽口



鍛冶炉の碗形滓

大阪城築城後 さらに 二の丸、三の丸、総構えの建設と秀吉が死去するまで防護機能拡充がすすめられる、3 重の堀と運河によって囲まれた難攻不落の城となる。秀吉は三の丸の完成を見ず、1599 年死去し、豊臣と徳川が 1600 年 関ヶ原の戦いで雌雄を決し、江戸時代が始まったが、豊臣と徳川が大阪城を舞台に引き続き対峙し、大阪夏の陣・冬の陣(16014・1615 年)を経て大阪城が落城し、豊臣氏が滅んでゆく。

この三の丸築造(1598 年-)に伴う大規模な盛り土の上に作られた大阪城の鍛冶工房。城外郭の軍事的な重要地点に存在した規模の大きな鍛冶工房で、豊臣方の勢力が設置した工房だろうとみられるが、鉄製品の遺物が出土せず、目的など詳細は不明である。

大坂夏の陣(1615 年)を前に豊臣方が軍事的に利用した可能性や、大坂城普請のために近隣に屋敷を構えた大名が土木用の鉄などを作る工房として設置した可能性もあると考えられている。

3. 写真アルバム 新緑の難波宮史跡公園・大阪城公園から大川端へ 2011.4.16.

1. 新緑の難波宮史跡公園 (古代 大化の改新に伴う難波遷都以来 約 150 年間の都跡)

大化改新(645年)にともなう難波遷都以来8世紀末まで約150年間、難波宮は日本の首都として、また副都として、日本の古代史上に大きな役割を果たした。昭和29年(1954年)以降長年にわたる発掘調査の結果、前期・後期二時期の難波宮跡が、中央区法円坂一帯の地に残っていることが明らかになった。



法円坂周辺から 東南側 難波宮史跡公園 左端木々の向こうに復元された大極殿基壇が見える 2011. 4. 16.



難波宮史跡公園 東側から 大極殿基壇 並びに西側のビル群 2011. 4. 16.

2. 新緑と葉桜が美しい大阪城 御堀端





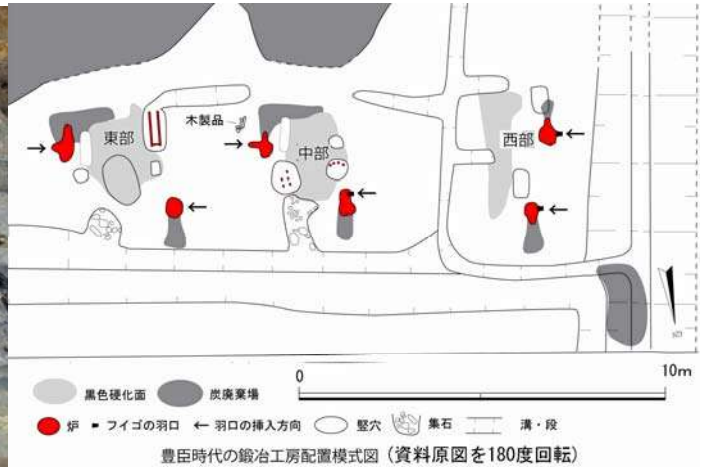
3. 桜満開の大川の堤(天満橋から天神橋へ) 八軒家浜界限

大阪城のお堀端の北西角大手町前から北へ坂を下って 大川端の京阪天満橋へ。天満橋・天神橋と大川端を歩いて中島へ。大川端は今は桜満開。 造幣局桜の通り抜けも始まって、天満橋を渡って桜ノ宮へ向かう人の群れが川端から見える。



資料 大阪城南側で豊臣時代の大規模な鍛冶工房を発見

2011. 4. 14. 大阪市 home page イベント・観光 2011. 4. 14. 新着情報 (大阪文化財研究所・大阪歴史博物館) より整理
<http://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/page/0000121181.html>

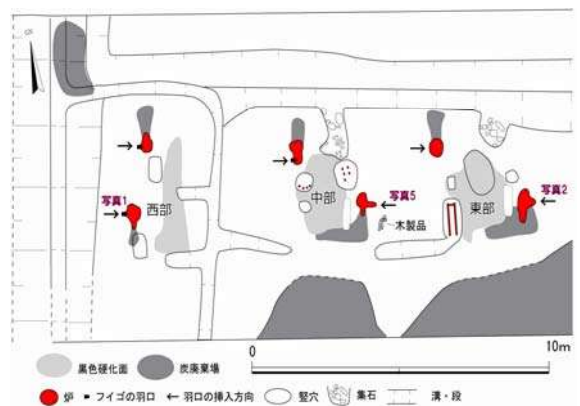
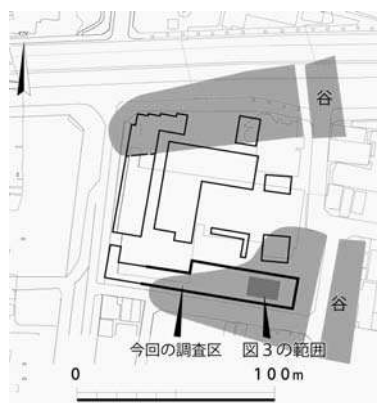


大阪城南側で発見された豊臣時代の大規模な鍛冶工房跡

大阪市教育委員会と財団法人大阪市博物館協会大阪文化財研究所は、平成 22 年 6 月から中央区森ノ宮中央 2 丁目で発掘調査を実施しており、今回、大阪城南側で豊臣時代の大規模な鍛冶工房を発見しました。

昨年 10 月には、調査地北西部でみつかった谷内から前期難波宮の宮殿建物に使われていたと考えられる大量の壁土が出土し、成果を公表したところですが、今回、調査地南部で新たに別の谷がみつかり、ここでも豊臣時代を中心とした重要な発見がありました。

(注記：江戸時代以前の大坂を指す場合は大坂としています。)



1. 豊臣氏大坂城と調査地の位置

2. 調査地の位置

3. 豊臣時代の鍛冶工房 配置模式図

調査の概要

調査地南部の調査区で、西から東にのびる谷の北斜面部を検出しました。

この谷は 1598 年に開始された豊臣期大坂城の三の丸築造に伴うと考えられる大規模な盛土造成によって埋め立てられ、調査区の東側は西側より 2m 以上低くなっており、この低い東側の平坦地から豊臣後期 (1598～1615 年) の鉄製品を製造する鍛冶工房が発見されました。

この鍛冶工房は大坂の陣までには廃絶したとみられ、廃絶直後に豊臣後期の盛土で直接埋め戻されていたため、極めて良好な状態で遺存していました。

工房の規模は東西 15m、南北 4～5m あり、内部が東西に並ぶ 3 つのグループ（東部・中部・西部）に分かれています。また、工房の外と考えられる南側に、炭や鉱石の不純物であるスラグ（鉱滓・こうさい）などが廃棄されていました。各グループには鍛冶炉が 2 基ずつあり、合計 6 基あります。

一部の炉には鞆（フイゴ）の羽口が設置された状態で残されており、このことから、鞆（フイゴ）の設置位置や工人の作業空間が想定できる可能性があります。

炉に接した作業空間の周りには複数の竪穴が設けられており、作業穴や水槽と考えられるものもあります。

また、1 基の炉の脇には木製の鋏先とともに、鞆（フイゴ）と羽口をつなぐ送風管と考えられる中をくりぬいた竹筒が置かれていました。



写真1. 鍛冶工房全景 北側から



写真2. 東部の一区画 東側から

東西に並んで 3 つのグループに分かれており、人がいる場所がそれぞれ作業空間と考えられる

2 基の鍛冶炉の間に作業空間があり、そのまわりに複数の竪穴が設けられていました。



写真3. 羽口が設置された鍛冶炉

鍛冶炉の一方に羽口が挿入されており、周囲を年度で、固めて鍛冶炉に固定されていました。



写真4. 鍛冶炉の横で見つかった竹筒と鋏先

竹筒はフイゴと羽口をつなぐ送風管と考えられ、鋏は未使用であることから、この炉で鋏に装着する刃先を製作していた可能性があります。



写真5. 水槽と考えられる木枠施設

長さ約 1m 幅 0.2m あり、内部に詰まった砂は赤く発色し、粉末化した鉄が多く含まれているようです。高温の鉄を急冷させて、表面を硬化させる焼き入れに用いた水槽と考えられ、刀などの長い製品を製作した可能性があります。

今回見つかった工房で製作された鉄製品自体は未発見ですが、上述した木製の鋏先は、隣接した竪穴からも出土しており、いずれも未使用であることから、この炉で鋏に装着する刃先を製作した可能性があります。

また、長さ 1m ほどの長方形の木枠施設もみつかり、焼入れ用の水槽と考えられることから、ここで刀などの長い製品を製作していた可能性もあります。現在も調査が進行中ですが、調査区西端の谷頭部分では、16 世紀代の中頃（大坂（石山）本願寺の時期）の礎石建物や大量の瓦が出土しており、寺院に関連する施設があった可能性があります。

調査成果の意義

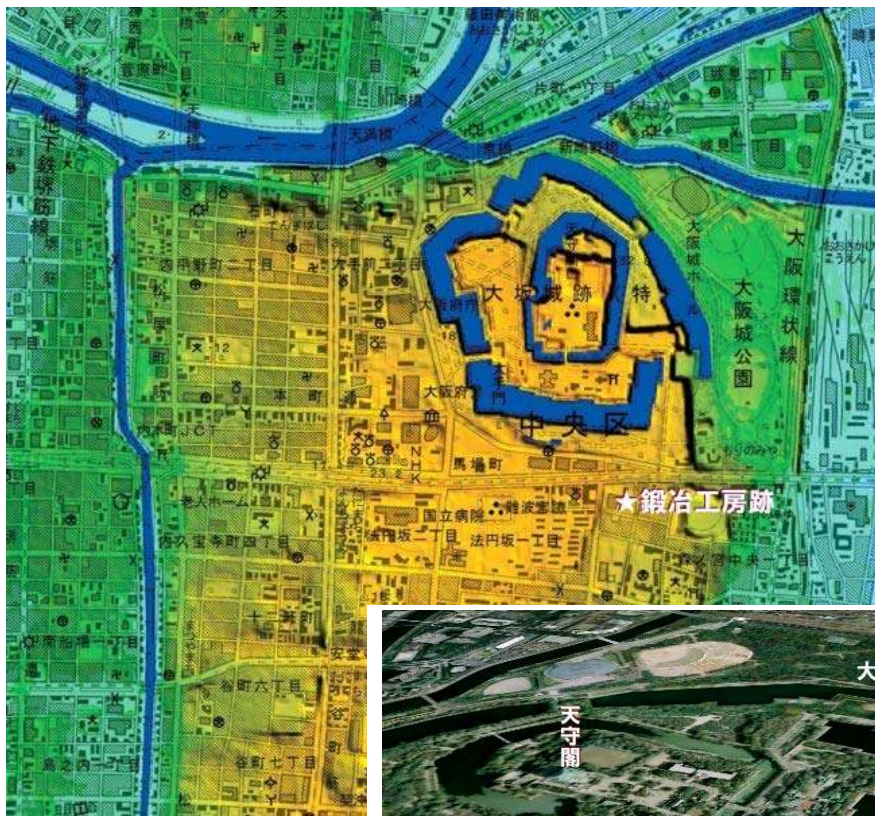
今回の調査では、敷地北側で発見された谷とは別の谷が調査地南部に存在していたことが判明し、豊臣時代後期の鉄製品の鍛冶工房という、重要な遺構が発見されました。工房の遺構は、廃絶直後に埋め戻されたため、極めて残りが良好であり、工房での工人配置や作業工程を解明することができる貴重な資料となります。

また、調査地は大坂城三の丸南部の推定範囲内にあたり、調査地南側の玉造一帯には諸大名の屋敷があったとされます。これまでも三の丸南西部の調査で、豊臣時代の鍛冶炉が発見された事例はありますが、今回のように工房全体の様子がわかる大規模な遺構が発見されたのは初めてです。

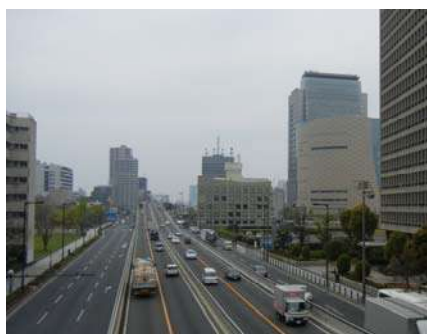
鍛冶工房は大坂城内に位置する施設となりますので、豊臣方のいずれかの勢力によって設置されたものであることは明らかなですが、目的など詳細は不明です。

鍛冶工房の規模が大きいこと、土木具である鍬の刃先や刀などを製作していた可能性があること、大坂城外郭の軍事的に重要な地点に立地していることなどから、大坂城の普請のために近隣に屋敷を構える大名によって設置された可能性も考えられます。

大阪文化財研究所・大阪歴史博物館資料 大阪市の home page より、4月14日 資料採取し、整理 by Mutsu Nakanishi
<http://www.city.osaka.lg.jp/kyoiku/page/0000121181.html>



大阪城天守閣



中央大通り

